

George Eliot Newsletter

of Japan



Number 1

June, 1998

生きているジョージ・エリオット

会長 海老根 宏

日本ジョージ・エリオット協会がめでたく発足し、第一回の総会を成功のうちに行うことができたことを、会員の皆さんとともに祝いたしたいと思います。このように幸先のよい出発ができたことについては、内田能嗣先生をはじめとする関西のヴィクトリア朝小説研究の方々、特に大嶋浩さん、山本紀美子さん、それに会場を引受けてくださった関西大学の上山泰先生などのお陰と、心から感謝しております。会員も百人を越え、学会としての基盤もひとまず整いました。今後は、会員の皆さんがこの協会を「自分たちの学会」と考えてくださり、運営に積極的に参加され、そして何よりもまずジョージ・エリオット研究において新しいもの、活性化するもの、刺激的なものを次々と発表されて、この会を盛りたてていってくださるよう、願っています。

ジョージ・エリオット協会の着実な発足を喜びながらも、私は何故これほど多くの人びとがジョージ・エリオットに惹きつけられるのかを考えて見ました。それは『アダム・ビード』の、何か古画を思わせるような堅牢この上もない農村社会の描写のためか、『フロス河の水車小屋』の、伸びようとして伸びきれないままに終わったマギーの生涯への共感なのか、社会学か歴史学の叙述と思わせる、一分の隙もない社会の生態の活写である『ミドルマーチ』に圧倒されるためなのか、それともあくまで理性的な社会描写を貫きながら、その底から不思議な夢と幻想を湧き出させる『ダニエル・デロンダ』の妖しい魅力を感じたためか？……この調子でいくらでも続けられそうです。それがもちろん、ジョージ・エリオット

という作家のスケールの大きさ、幅の広さというものであります。エリオットは作家として登場するのが遅かったせいもあり、また最初から自分の思想的立脚点を確立してから創作に踏みきったというせいもあるのですが、その作家的生涯はきわめて安定しているような印象を抱きがちです。そして初期のころから変わらない冷静沈着な「語り手の論評(コメント)」があるために、エリオットの小説はともすると実際以上に落ち着いた、安定したものと思われがちですが、実は上のように各作品の印象を並べてみるだけでも、堅固な安定どころではなく、絶えず変化し発展していった小説家だということが分かります。

F.W.H.マイヤーズが伝えている有名な挿話では、ケンブリッジに招かれたエリオットが、夕暮れのフェローズ・ガーデンを歩きながら、かつて人間に靈感を与えた三つの言葉——神、靈魂不滅、義務——のうち、「第一のものは考えられず、第二のものは信じられず、しかし第三のものは絶対の強制力を持つ」と「恐ろしい真剣さで」語ったといいます。彼女の「重々しい威厳にみちた顔はまるで巫女(シビル)のごとく、薄闇の中で私に向けられていた」とマイヤーズは伝えています。この厳粛なジョージ・エリオットは作家としては重々しすぎるかもしれません。しかし私たちはこの情景から神々しい巫女の像ではなく、神なき世界の実存的不安に生きるエリオット、私たちの同時代人エリオットの姿を(マイヤーズの恭々しい崇敬のベールを通して)読みとるべきではないでしょうか。安定よりは不安定と変化を、落ち着きより不安と模索を、このような「生きているエリオット」の姿を取戻すこと、これが私たちの目指すところではないでしょうか。